



神戸大学経済経営研究所

Research Institute for Economics and Business Administration, Kobe University

■コラム

RIEB ニュースレターNo.272 2025 年 8 月号

生活者のための金融論テキストを目指して

神戸大学 経済経営研究所
教授 家森 信善

2025 年 2 月に『ベーシックプラス 金融論』の第 4 版を刊行しました。1989 年に大学教員となってから、まもなく 40 年を迎えますが、私は、金融論や経済学に関するテキストの執筆に多くの時間を費やしてきました。このニュースレターをよい機会と捉え、金融論のテキストライターとしてのこれまでを振り返ってみたいと思います。

藤田先生・丸谷先生の下でのテキスト執筆・編集

私が初めて経済学に関するテキストに寄稿したのは、恩師・藤田正寛先生（元神戸大学経済経営研究所長）編著の『テキストブック 国際金融論』（1990 年 6 月、有斐閣）に収録された「第 7 章 開発金融」「第 3 節 累積債務問題と開発金融」でした。

藤田先生の大学院ゼミに新入生として参加することになった際、「もうすぐ国際金融論のテキストを出す、それまではとりあえず〇〇でも読んで勉強しておいてください」との指導を受けていたのですが、出版の遅れにより、最終的には私も寄稿することになりました。有斐閣という一流出版社と原稿やゲラのやりとりをすることで、まだ講義を担当していなかった助手時代にも関わらず、「大学教員になった」という実感が湧いたことを覚えています。

1994 年 4 月には、同じく神戸大学の恩師・丸谷冷史先生と共編の形で、中央経済社から『経済政策講義』を刊行しました。私は「第 7 章 経済政策論のためのマクロ経済学」「第 11 章 金融政策」「第 14 章 経済の国際化と経済政策：むすびにかえて」の 3 章を執筆しました。第 7 章の執筆は後に、『基礎からわかるマクロ経済学』（2001 年 12 月、中央経済社）、『ベーシックプラス マクロ経済学の基礎』（2017 年 3 月、同）へとつながりました。

寄稿したことそのもの以上に、丸谷先生のお手伝いとして編集作業を経験できたことが、その後の研究者生活において非常に大きな糧となりました。現在までに私は約 30 冊の編著書を出版していますが、多くを中央経済社さんにお願いするようになったのは、このときの経験がきっかけでした。



藤原先生とのテキスト編集

1998年4月には、藤原賢哉先生（現・神戸大学大学院経営学研究科教授）との共編により、『現代金融論講義』（中央経済社）を刊行しました。私たちもまだ若く、執筆陣もほとんどが後輩で、テキスト執筆が初めてという人が大半でしたので、原稿についての意見交換をととても熱心に行った記憶があります。

この書籍は2002年4月に『金融論入門』（中央経済社）に発展しました。

生活者目線への挑戦『教養としての金融知識』

単著のテキストとして、『教養としての金融知識』を中央経済社から1999年9月に刊行しました。

藤原先生との共編テキストが大学の標準的な金融論の教科書であったのに対し、この書籍ではより入門的な読者を想定し、テキストとしての利用も可能でありながら、手軽に読める読本として位置づけました。

同書の「はじめに」には、以下のように記しました。このときから生活者目線でわかりやすく金融論を伝えたいという気持ちを持っていたことがわかります。

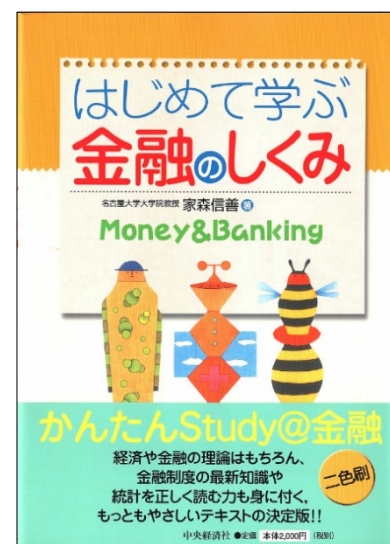
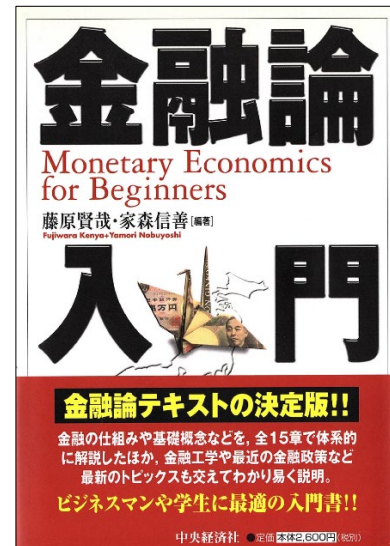
「本書の目的は、自己責任が求められる新しい金融の時代において、生活者として最低限知っておくべき**金融知識を伝える**ことにある。・・・本書で説明する内容は、われわれが直面している**現実の金融問題を理解するのに必要かどうか**という点から選択されている。」

（太字は、今回の引用にあたって付したものです。）

大学テキストとしての挑戦『はじめて学ぶ金融のしくみ』

2004年12月に『はじめて学ぶ金融のしくみ』（中央経済社）を刊行しました。大学でのテキスト利用を意識し、授業回数に合わせて14章構成とし、各章を1コマで終わるように工夫しました。

当時は金融機関の破綻が相次ぎ、金融システムへの関心が高まっていたこと、また私自身の研究関心も反映し、マクロ金融政策と金融システム政策をほぼ同等の比重で扱った点が特徴です。従来の金融論テキストは、政策決定者の視点に偏りがちでした。それに対して私は、生活者の視点での説明を心がけました。



第1版でいただいた多くの先生方からのコメントをもとに、2008年3月に第2版を刊行しました。197ページだった初版が248ページへと大幅に増え、2011年2月の第3版では259ページとなり、2013年4月の第4版では、金融規制の改革や金融政策の展開、さらには金融経済教育も取り入れ、ついに300ページになりました。分量は増えてきましたが、おかげさまで、本書は多くの先生方にご採用いただき、初版（14刷）、第2版（15刷）、第3版（11刷）、第4版（12刷）と版を重ねました。

『ベーシックプラス 金融論』の新たな挑戦

『はじめて学ぶ金融のしくみ』は、中央経済社の「ベーシックプラス」シリーズの一冊として改題・改定され、2016年4月に『ベーシックプラス 金融論』として刊行されました。

「勉強できる時間が限られている中で、あれもこれも詰め込んでしまうと、読者が消化不良になりかねません」（「はじめに」より）という思いから、初心に立ち返り、内容を大胆に絞り込んで243ページにまとめました。「普通の金融論の教科書に比べて、現実の経済に関する話題を多く取り上げる」という構成も、本書の特徴です。内容を削る決断は容易ではありませんでしたが、「本当に必要な情報か」を問い直す過程そのものが、大きな挑戦となりました。

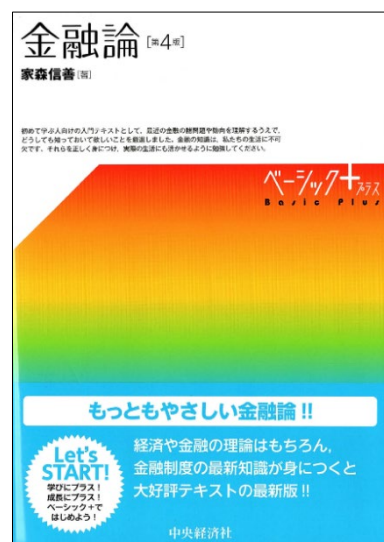
初版（18刷）以降も改訂を重ね、2019年1月に第2版（19刷）、2022年2月に第3版（19刷）、そして2025年2月に第4版を刊行しました。

第4版では章構成を14章から15章へと変更しました。これまで各章に分散していた金融経済教育やパーソナルファイナンスに関する話題を、第15章として再構成し、「生活者にとっての金融」として内容を充実させました。一方、講義時間の制約も考慮し、全体のページ数は従来と同程度に抑えました。そのために、説明を簡素化したり、思い切って削除した箇所もあります。その結果、内容がすっきりとまとまり、初学者にもより読みやすくなったと考えています。

おわりに

振り返れば、1999年の『教養としての金融知識』以降、私はほぼ3年に1度のペースで金融論のテキストを改訂・執筆してきました。このサイクルは、金融をめぐる現実の変化の中で、生活者にとって「今、何が大切な金融の論点か」を選び、どうすれば初学者に伝えられるかを探り続けてきた試行錯誤の記録でもあります。

また、テキストで取り上げた話題の中には、自らも一定の役割を果たしてきたものも多く、それは金融システム研究者としての歩みの記録でもあります。たとえば、金融機関への公的資金注入については、10年間にわたり金融庁の金融機能強化審査会の委員を務め、金融庁の実務担当者とともに、公的資金制度の在り方を模索してきました。テキストの中で詳細に



触れにくい部分もありますが、そうした経験が読者に本質を伝える一助になっていると感じています。

これまでに執筆したテキストを多くの先生方や学生にご利用いただきました。学会や研究会で、初対面の先生からテキストへの感想をいただき、そこから交流が始まったこともあります。学会会場でアルバイトの学生さんから声をかけられたことも何度もあり、非常に励みになってきました。

研究とテキスト執筆の間には、私自身にとって良い循環が生まれていると感じています。今後も、変化し続ける金融の世界を楽しみながら、生活者の視点から金融論をわかりやすく伝える努力を続けていく所存です。